AALA ニューズ 227 号　2026 年 11 月 21 日（土曜日）

戦争への道とウクライナの不確かな未来

スティーブン・キンザー

Znet　2026 年 11 月 3 日

Boiling Point: The Road to War and Ukraine's Uncertain Future - ZNetwork

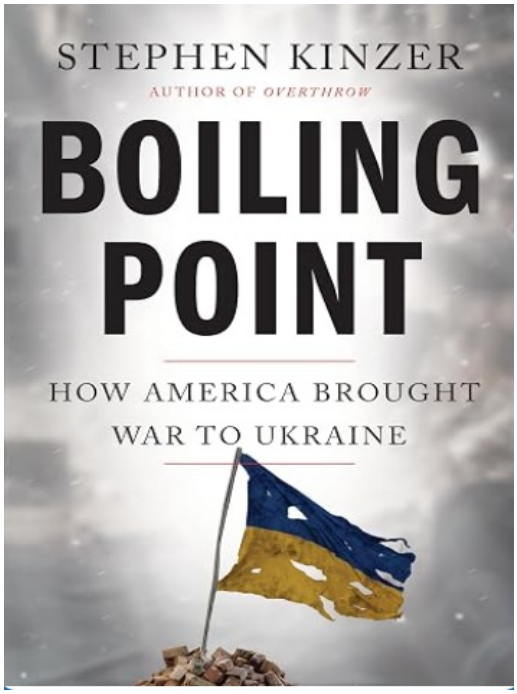
ウクライナ戦争をめぐっては、ロシアが全面的な侵攻を開始した 2024 年２月 24 日から話が始まることが多い。しかし、両国に紛争をもたらした対立や政治的決定は、何世紀も前にさかのぼる。また冷戦の始まりは、米国がウクライナとモスクワの関係をさらに悪化させようとして始めた継続的な取り組みの契機となった。

ジャーナリストで歴史家でもあるスティーブン・キンザーは新刊『沸騰点:アメリカがウクライナに戦争をもたらした方法』で、歴代のアメリカ政権がどのようにウクライナ民族主義を育成し、モスクワに挑戦し、紛争の舞台を整えたかを描いている。キンザーは侵攻を孤立した事象と見るのではなく、冷戦初期のソ連ウクライナでの CIA 秘密作戦からウクライナ独立、冷戦後の NATO 拡大をめぐるロシアとの緊張、そして戦争勃発に至るまで、ワシントンの数十年にわたる関与を詳述している。

この地域での米国の外交政策の歴史を詳細かつ広範に説明しつつ、大きな地政学的力を見失うことなく提供している。戦争の起源に関する深い調査にもとづいて従来の物語に挑戦し、主流の議論にはほとんど見られない視点を提供している。

戦争に先立つ数十年の地政学的競争と政治的動機を理解することは、なぜ戦争が始まったのか、そしてどこへ向かうのかを理解する上で不可欠だ。最終的な和平合意がどのようになろうとも、領土や安全保障の保証、ウクライナの再建とヨーロッパとロシア間の位置づけについて困難な問題がつきつけられるだろう。戦争はウクライナとロシアの対立を解決することなく終わる可能性が高い。キンザーが著書で述べているように、アメリカの政策が深めた影響に、両国と地域全体は今後何年も対処しなければならなくなる。

ジャーナリスト、作家、そして歴史家として、キンザー氏は数十年にわたり、米国の外交政策や介入主義、そして海外への関与がもたらした結果について考察を続けてきた。彼の記事は『ニューヨーク・タイムズ』をはじめとする主要メディアに掲載されており、国際情勢の形成における米国の役割を探求した著書も数冊執筆している。以下は在米ジャーナリストによる著者へのインタビューの要約。



戦争は 2022 年に突然始まったのではない

ウクライナ戦争を 2022 年 2 月 24 日のロシア侵攻だけで理解するのは誤りだ。西側で広く使われる「いわれのない（unprovoked）侵攻」という表現には異議がある。戦争の背景には 75 年に及ぶ米国の対ロシア政策があったというのが本書の核心である。米国は 1940 年代末からウクライナ民族主義勢力を支援し、ロシアに対する圧力手段としてウクライナを利用してきた。冷戦終結後もその方針は続き、独立後のウクライナで反ロシア的な政治勢力や市民団体への支援を拡大した。ロシアの侵攻は国際法上正当だったとはいえないが、侵攻の原因を理解するには長期的な米露対立の歴史を見る必要がある。本書の目

的は、2022 年の出来事を単独で捉えるのではなく、数十年にわたる地政学的競争の結果として戦争を再解釈することにある。

米国はこのままウクライナ支援を続けるのか

ワシントンでは依然として超党派的に反ロシア感情が強く、ウクライナ戦争を成功とみなす人々が多い。多くの米政策担当者はウクライナそのものよりもロシアを弱体化させることに関心があり、ロシア軍に大きな損害を与えたことを成果と考えている。その一方で、何万人ものウクライナ人が死亡し、国家基盤が破壊された事実は十分重視されていない。ワシントンのエリート層はウクライナの実情に詳しいわけではなく、戦争を対ロシア戦略の一環として捉えている。結果として、ウクライナは深刻な被害を受けたが、米国や一部欧州諸国では「ロシアを傷つけることができた」という理由で肯定的に評価される傾向がある。

戦争回避可能性

戦争回避の最も有効な方法は米国が「ウクライナは NATO に加盟しない」と明言することだった。米国政府内部でもウクライナの加盟は現実的ではないと認識されていた。だが、ロシアに譲歩しているように見えることを嫌い、公には認めなかった。これは失われた外交的機会だったと考えている。また、開戦直後のイスタンブール交渉は重要で、その中立化案が和平の基礎になり得た。モデルケースとして戦後のオーストリアが挙げられる。軍事同盟に参加せず外国軍を駐留させない中立国家として成功した経験を参考にすべきだった。ウクライナも東西を結ぶ橋として存在する方が安定につながったが、勝利を追求する発想が妥協を困難にした。

反 NATO 論は親ロシアなのか

キンザーは、NATO 拡大に反対することとロシア侵略を支持することは別問題だと主張する。彼はロシアが最も懸念しているのは、自国国境近くに敵対的な

核保有軍事同盟が存在することだと説明する。その例として、中国がメキシコに軍事基地を設置した場合や、ロシアがカナダに空軍基地を建設した場合を挙げ、米国なら決して容認しないだろうと述べる。つまり、西側は自国なら許さない安全保障上の状況をロシアには受け入れるよう求めているというわけである。彼は欧米諸国がロシアの安全保障上の利益を認識しない限り、欧州の安定した安全保障体制は成立しないと考える。和平には、ロシアを含むすべての国の安全保障上の懸念を考慮した新たな枠組みが必要だとしている。 [Boiling Po...- ZNetwork]

---

⑤ 冷戦後に戦争を防ぐ道はあったのか

キンザーは、1990 年前後が最大の分岐点だったと考える。ジョージ・H・W・ブッシュ政権はゴルバチョフに対し NATO 東方拡大を進めないと約束したが、その後のクリントン政権で方針が変わったという。また彼は、ウクライナは大国対立の戦場にされたと見る。1980 年代のニカラグア内戦を取材した経験から、小国が大国間競争の犠牲になる構図がウクライナでも繰り返されていると指摘する。さらに、西部の民族主義的ウクライナ人と東部のロシア語話者の間には深い歴史的分断が存在すると説明する。この溝は極めて大きく、持続的な国家統合には連邦制導入など大幅な制度改革が必要だった可能性があると論じている。 [Boiling Po...- ZNetwork]

⑥ 停戦後の国境問題はどうなるのか

キンザーは、最終的な和平交渉では領土問題について妥協が避けられないと考えている。特にクリミアやドンバス地域については、戦争前の状態へ全面的に戻すことをロシアが受け入れる可能性は極めて低いと見る。彼によれば、戦争は理想的な解決ではなく現実的な解決によって終結するものであり、戦場で形成された勢力均衡が交渉の出発点になる。したがって、ウクライナが失われた全領土を軍事的に回復するとの目標は、戦争を長期化させる恐れがあるという。キンザーは過去の紛争解決の例を挙げながら、和平合意では双方が不満を抱えるのが普通であり、完全な正義よりも流血の停止が優先されるべきだと主張する。重要なのは国境線そのものではなく、将来の戦争を防止する安全保障

体制を構築することだとしている。彼は、欧州が長期的安定を求めるなら、現実を踏まえた外交的妥協に向き合う必要があると論じている。

---

⑦ ゼレンスキーの将来をどう見るか

キンザーは、開戦当初のゼレンスキー大統領を比較的柔軟な人物として描いている。もともとゼレンスキーはロシア系住民との融和やドンバス和平を公約に掲げて当選したが、国内政治の圧力や戦争の激化により立場を変化させたと分析している。彼によれば、戦争が続くにつれ妥協の余地は狭まり、ゼレンスキーも強硬路線を取らざるを得なくなった。今後については、最終的な和平条件がゼレンスキーの政治的評価を大きく左右するとみている。もし領土譲歩を伴う和平を受け入れれば国内から批判を受ける可能性がある一方、戦争を終結させた指導者として評価される可能性もある。キンザーは個人の能力よりも構造的要因を重視し、誰が指導者であっても米露対立という大きな力学の中で行動を制約されると考えている。

---

⑧ この戦争は欧州に何をもたらしたか

キンザーは、ウクライナ戦争によって欧州が安全になったとは考えていない。むしろ欧州は冷戦後最大の軍事的緊張状態に置かれたと評価している。戦争により軍事支出は増加し、多くの国々が再軍備を進めた一方で、ロシアとの政治的・経済的関係はほぼ崩壊した。特にエネルギー分野における相互依存の解体は、欧州経済に長期的な影響を与える可能性があるという。さらに彼は、欧州諸国が独自外交よりも米国主導の戦略に追随する傾向を強めたことを懸念している。かつて欧州にはロシアとの協調による安全保障体制を模索する流れが存在したが、現在はそうした議論が後退していると見る。結果として欧州は、より多くの軍事的負担と地政学的リスクを抱え込むことになったと論じている。

---

⑨ 欧州連合は今後どのような選択を迫られるか

キンザーは、欧州が真に自立した国際的主体になるためには、自らの安全保障戦略を独自に構築しなければならないと主張する。現在の欧州は安全保障面で米国への依存が強く、そのことが対ロシア政策の選択肢を狭めているという。彼は欧州が米国との同盟関係を維持しつつも、自国の利益に基づいてロシアとの関係を再構築する必要があると考えている。戦争終結後にはエネルギー、安全保障、経済協力など多方面でロシアとの関係正常化が重要課題になる可能性が高いからである。また、欧州の長期的繁栄には東欧諸国を含めた安定した地域秩序が不可欠であり、ロシアを恒久的に排除する構想は現実的ではないと指摘する。彼の見方では、欧州統合の将来はロシアとの対立固定化ではなく、新たな共存の枠組みを築けるかどうかにかかっている。

---

⑩ 本書執筆で最大の発見は何だったか

キンザーは、本書の調査を通じて最も驚いたこととして、第二次世界大戦直後から現在に至るまで、米国がウクライナ国内の反ロシア勢力と継続的な関係を維持してきた点を挙げている。彼によれば、この歴史は一般にはほとんど知られておらず、現在の戦争を理解する上で重要な背景となっている。また、冷戦後に多くの人々が期待した「協調的な欧州秩序」が実現せず、代わりに対立の再生産が続いたことも大きな発見だったという。彼は大量の公文書や証言を調査し、米露双方が相互不信を積み重ねながら今日の危機へ向かった過程を描こうとした。本書の目的は責任を一方だけに帰することではなく、長期間にわたる政策決定の連鎖を明らかにすることにあると説明している。

---

⑪ ウクライナ復興の展望

キンザーは、ウクライナの復興には莫大な資金と長期間の国際支援が必要になると考えている。しかし復興の前提条件は停戦と安全保障の確立であり、戦争継続下では本格的再建は不可能だとする。人口流出、インフラ破壊、産業基盤の損失など、ウクライナが直面する課題は極めて大きい。そのため、復興は単なる建物の再建ではなく、国家と社会の再建という長期事業になる。さらに彼

は、復興が大国間の経済競争の場になってはならないと警告する。欧州、米国、ロシアを含む関係国が安定した環境づくりに協力しなければ、復興は持続的成果を生まないという。重要なのは軍事的勝敗ではなく、人々が普通の生活を取り戻せる環境をつくることだとしている。

---

⑫ NATO の将来をどう見るか

キンザーは、ウクライナ戦争によって NATO は短期的には結束を強めたと認めている。しかし長期的には、NATO がどのような役割を果たすのかという根本問題が再び問われると見る。冷戦時代にはソ連封じ込めという明確な目的があったが、ソ連崩壊後の NATO 拡大はロシアとの対立を深める要因になったというのが彼の見解である。もし欧州に持続的平和を築くのであれば、ロシアを排除する構造よりも、ロシアを含む包括的安全保障体制が必要ではないかと問題提起する。彼は直ちに NATO 解体を主張しているわけではないが、現在の枠組みが永続的に機能すると考えているわけでもない。欧州の将来は、軍事同盟の拡大ではなく、対立当事者全体を包摂する新たな安全保障秩序を構築できるかどうかにかかっていると結論づけている。

全体を通じてキンザーの主張は、「ロシアの侵攻を正当化するのではなく、戦争の原因を長期的な米露対立の中で理解すべきだ」「ウクライナ戦争は軍事的勝利ではなく外交的妥協によって終わるべきだ」という二つの軸に集約できます。これは現在の西側主流派の説明とはかなり異なる解釈であり、その点がこのインタビューと著書の最大の特徴です。

文字数の関係で前半 5 問をまとめました。続く質問（停戦後の国境、ゼレンスキーの将来、欧州への影響、EU の選択、最大の発見、復興、NATO の将来）についても同様に各 500 字で続けて要約できます。

戦争は 2022 年に突然始まったのではない

質問　あなたは新刊書で、ウクライナとロシアに対する米国の政策の歴史を検証し、第二次世界大戦終結以降ワシントンがウクライナの民族主義を育み、モスクワの影響力に挑戦しようとした取り組みたどり、それがこんどの戦争と緊張につながったかを探っている。まずは、この本について、その中心的な主張と、今日の戦争を理解するために必要な歴史について少し教えていただきたい。

スティーブン・キンザーこの本で伝えたかったポイントの一つは、ウクライナ戦争について私たちが伝えてきた多くのことが間違っているということです。特に、ロシアの侵攻について常に耳にする言葉があり、その言葉が私を 200 回目ほど聞いた後に私を激怒させましたが、その言葉はもちろん、理由のないものです。私たちはいつも、2 月の侵攻やロシアの侵攻、軍事侵攻だけでなく、無差別な侵攻についてもよく目にします。この侵攻については、多くの理由であったと言えます。例えば、多くのアメリカの作戦と同様に国際法上違法でしたが、決して無差別ではありませんでした。その発言をどう正当化すればいいのでしょうか?それは私の本です。

この本は、ウクライナをロシアに対する破城槌に変えようとする 75 年間にわたるアメリカの途切れない計画をたどっています。これは 1940 年代後半に武

装コマンド部隊がウクライナに降下したことから始まり、1991 年のウクライナ独立に至る一連の秘密作戦を経て続きました。その後、プロジェクトは本格的に加速しました。[アメリカは]ウクライナ国内の反政府グループやロシアとの対決を支持するグループを推進するために多額の資金を費やしました。

それがついに爆発しました。ロシアを挑発し、ウクライナでこのナショナリズム感情を煽ったのは正しいことだと主張するかもしれません。それでいいと思っています。しかし、ウクライナ戦争の正義や性質について判断する前に、その前に何が起こったかを知るべきです。

もしあなたがそのスナップショットを見ると...2022 年 2 月 24 日、何が起こったか見ることができます。ロシアは平和な国ウクライナに侵攻しました。しかし、その映像は 75 年以上にわたる非常に長い映画の一コマとして捉えるべきです。私の本はウクライナ戦争の真の背景をあなたに示そうとする試みです。

JPR:ワシントンは今もウクライナ支援に超党派のコミットメントを持っていると思いますか?それともほぼ達成したものの、トランプ政権の和平交渉の努力の中で今後どう進めるべきか迷っているのでしょうか?

SK:ワシントンのほとんどの人は今でもウクライナ戦争は素晴らしいアイデアだと考えていると思います。それはロシアへの根深い憎悪から生まれており、ロシアの拡張やロシアにとって良いことは世界にとって悪いと信じている。実際、多くのアメリカ人はこの戦争を成功と考えていると思います。理由は、我々が多くのロシア人を殺してきたからだ。数万人のウクライナ人が殺され、国が壊滅的な被害を受けたという事実は、ワシントンにはあまり意識されていません。

ワシントンで最も熱心にこの戦争を推進している人々の多くは、地図上でウクライナを見つけることすらほとんどできない。彼らはウクライナに興味がない。彼らが関心を持っているのはロシアだけです。…その結果、ウクライナは壊滅的な被害を受けましたが、アメリカ人や一部のヨーロッパ人にとっては、ロシアにダメージを与えたため勝利のように思えます。

JPR:あなたは、特に冷戦初期のウクライナ近代国境内のソ連領内での CIA のスパイ活動や秘密作戦について書いており、それが大きな緊張を生み出しました。冷戦後の NATO 拡大もロシアとの大きな緊張の原因となっています。

現在、NATO はトランプ政権下の米国政策においてあまり中心的でないようです。NATO の役割が縮小すれば、ロシアへの圧力を維持するために主導権を握る他の機関や政府機関はどこでしょうか?

SK:NATO 論争全体は、この話の中でも最も悲しい部分の一つです。もしジョー・バイデンがただ立ち上がり、「ウクライナは NATO に加盟しない」と五語だけ言っていれば、戦争は回避されていたでしょう。彼はそれを言おうとしなかった。しかし最悪なのは、アメリカの指導者たちが私的にウクライナが NATO に加盟することは決してないと認めていたことです。まだ準備が整っておらず、解決には何十年もかかる様々な問題がありました。しかし誰も公の場でこれを言いたがりませんでした。なぜなら、私たちがロシアに反応しているように見え、ロシアに脅され、ロシアの望むことをしているように見えたからです。ロシアに信頼性を与えているように見えることへの恐怖があまりにも大きかったため、私たちはそれを拒否しました。

この戦争には多くの出口があり、単に NATO がウクライナを加盟国として受け入れないと宣言すれば、戦争は止まっていたでしょう。ウクライナから本当に必要なのは、戦争開始から 1 か月後にイスタンブールでまとめられた和平合意です。ヘンリー・キッシンジャーも同じことを言っていた――ウクライナは東西をつなぐ架け橋であるべきだ。両陣営が争う領土であってはならない。

優れたモデルはオーストリアでしょう。第二次世界大戦後、占領軍の撤退を確保するため、オーストリアは条約に署名し、憲法に軍事同盟に加入せず、外国軍を自国領土に置かないという誓約を盛り込んだ。それがとてもうまくいっています。それはウクライナのモデルになるべきですが、アメリカ人は勝利の匂いがしないから好ましく思いません。

JPR:あなたは本をウクライナの人々に捧げ、彼らがアメリカや NATO がロシアに対して取っている政策の結果を本当に理解していなかったと主張しています。

米国や NATO のウクライナ政策に反対することはロシアの侵略を支持することだと主張する人々にどう答えますか?あなたの本を読んだこと以外に、その見解に最も説得力のある証拠や議論は何でしょうか?また、アメリカや西側諸国の役割を再考する理由は何でしょうか?

SK:ロシアがウクライナ、ましてやそれ以上の領土を奪おうとしているとは思いませんが、ロシアには理解できる恐怖があります。それは、自国の国境に自分たちが正当なメンバーでない核武装軍事同盟を望んでいないということです。私は次の例えを提案します。例えば、中国がメキシコと共にベラクルスに軍事基地を開設することを決めたとするか、あるいはロシアがケベックに空軍基地を開設したとしましょう。アメリカは「どの国にも自国の安全保障パートナーを選ぶ権利があるので、私たちにできることはないのだろう」と言うでしょうか。もちろん、そんなことはしません。私たちはその基地を爆撃するつもりでした。私たちはそんなことは絶対に許しません。だから今、私たちはロシアが決して受け入れないものを受け入れることを期待しているのです。

交渉の余地はありますが、それはアメリカとヨーロッパが、今や戦争の極度の重荷を本当に背負い、ロシアの安全保障上の利益を認めなければならない場合に限られます。これは一部のヨーロッパの首都では恐ろしい考えです。しかし最終的に、ヨーロッパに平和と安定をもたらす唯一の方法は、ロシアを含むすべての国の安全保障上の利益を考慮した安全保障体制が整うことです。

JPR:コソボとセルビアからの分離を目指している西側の取り組みについてお話しされていますね。2013 年から 2014 年のマイダン革命後、ウクライナ東部および南東部で分離主義感情を平和的に受け入れる現実的な可能性はあったのでしょうか?それともウクライナ民族主義勢力、西側の利益、ロシアの影響があまりにも深く根付いていたのでしょうか?そして、冷戦終結後に現在の紛争を防ぐためにどのような代替政策があったのでしょうか?

SK:最も重要な出口は冷戦後の初期、つまり 1990 年代から 90 年代初頭の頃でした。当時の大統領ジョージ・H・W・ブッシュはこれを十分に理解しており、ミハイル・ゴルバチョフに対し NATO の東方拡大を推進しないと約束しました。もちろん、すぐにブッシュは去りました。クリントンが登場しました。まったく異なるアプローチがありました。しかし、中立的なウクライナを支持する十分な理由があります。

そして、私がこのプロジェクトにこれほど情熱を持った理由の一つは、1980年代の経験の一部として、私はニカラグアのコントラ戦争を取材していた記者だったことに気づいたからです。その経験から私が得た一つのことは、戦争はニカラグアとは全く関係がなかったということです。それは二つの大国間の対立であり、彼らはその貧しい国を戦う舞台に選んだのです。そしてもちろん、亡くなった人々のほとんどは地元の人々でした。

同じことがウクライナでも起きています。この戦争はウクライナの問題ではありません。苦しんでいるのはウクライナであり、大国たちはその運命を握っている。さて、平和への障害について話していますね。東ウクライナと西ウクライナの違いについては、あなたの言う通りです。実際には、歴史の偶然で同じ国境内に閉じ込められた二つの国です。そして、何らかの国家的合意に達することの大きな難しさの一つは、ロシア語を話さないウクライナ人、特にウクライナ西部の人々にとって、反ロシア的でロシアを憎むことが、国家的な愛国的ウクライナ人アイデンティティの根本的な部分であるということです。そして、国内に何百万人ものロシア人がいる限り、他のウクライナ人は自分たちを第五列だと感じています。彼らは常に敵の利益を促進し続けるでしょう。

したがって、ウクライナの指導者が平和条約に署名すれば、歴史だけでなく、極右民兵が攻撃してくるという大きな危険にも直面しています。国の二つの地域間の亀裂は非常に深く、連邦制の構造がなければ、東部の州を直接ロシアの支配下に置かない限り、どうやって統合できるか想像しにくい。

JPR:ウクライナの戦後の最前線は、2008 年の戦争後のロシアとジョージアの状況のように、不安定な膠着状態とロシアが徐々に国境を変えていく状況に似ている可能性はありますか?それともウクライナでは異なる結果を予想していますか?

SK:ロシアは、自分たちが主張する東部 4 州の支配を固めるまで止まらないと思います。その後、凍結状態に陥る可能性はあると思います。これにより、一部のウクライナ人が領土の一部を放棄する合意に署名することを避けられますが、戦闘を終わらせる可能性もあります。理想的な解決策ではありません。韓国で起きていることと比較したいです。しかし少なくとも、どちらの側も耐え難い立場に置かずに紛争を終わらせる一つの方法かもしれません。

JPR:戦後のヴォロディミル・ゼレンスキーの政治的将来をどのように見ていますか?戦時中の指導者は平時でも国民の支持を維持するのに苦労することがあります。それとも、彼はウクライナ政治の中心的存在であり続けると思いますか?

SK:ゼレンスキーは本当に奇妙な人物として登場した。私の本には彼がどのようにやったかについてのセクションがあります。彼はテレビのパーソナリティでした。彼は腐敗に反対する政党を率いた架空の人物でした。それからテレビ局を所有していたオリガルヒが彼に言ったんだ、「あの偽のパーティーをやろうぜ。本物のパーティーにして、君を大統領選に立候補させるんだ。」だから、彼はその仕事にふさわしい最もありそうない人物だった。

そして、彼がウクライナの将来において主要な人物になるとは思いません。かわいそうなゼレンスキーは、今本当に難しい立場にあると思います。彼の頭の中で考えているのはこうだと思います。「つまり、アメリカ人は私が取引をしなかったから怒鳴っているのです。私はロシアとの妥協を受け入れませんでした。しかし、戦争が始まってわずか 1 か月後にロシアと妥協しようとしたところ、止められました!やめてほしいと言われました。だから今、君の言う通りにしたことで罰を受けているんだ。」ゼレンスキーの苛立ちも理解し、共感します。

JPR:ウクライナがロシアの利益に対抗してマリで武装勢力を訓練しているとの報告があり、ウクライナはワシントンからの圧力にもかかわらずロシアの石油インフラへの攻撃を続けています。そしてウクライナは現在、国自体が著しく弱体化しているにもかかわらず、大規模な戦闘経験のある軍隊を有しています。特にウクライナ側が西側諸国やアメリカに裏切られたと感じるようになった場合、ヨーロッパやアメリカにどのような影響が及ぶでしょうか?

SK:あなたが説明している状況は、中東で起きていることとある程度類似しています。局所的な戦争は広がり、標的とされた国々から遠く離れた場所で様々な形で現れています。

ですから、最終的に高度に軍事化されたウクライナになると思います。最悪なのは、最も強力な軍事部隊の多くが実際の正規軍ではなく、ナチスの徽章を誇りに使い、ナチスと共に戦いホロコーストに加担したウクライナ人への忠誠を

誇りに示していることです。これはヨーロッパが対処しなければならないプロジェクトになるでしょう。

しかし、ヨーロッパはまだ戦後のことを考えているとは思いません。ヨーロッパは完全な幻想の中にいるように感じます。彼らは、ウクライナに武器や資金を注ぎ続ければ、何とか状況が変わると考えています。一方で、ヨーロッパ諸国内部では大きな政治的混乱が起きています。その多くは、政府が学校やその他の人々が望むサービスに資金を使わないことへのフラストレーションに基づいています。その理由の一つは、多くの資金がウクライナに流されていることです。

ですから、ウクライナに対する不満が高まるのを見るかもしれませんし、戦争が最終的に終わるか凍結するかによって、人々は一般的にウクライナに同情的になるか、あるいは非常に敵対的になるでしょう。これは、このような戦争が止められないプロセスを引き起こし、今後数十年にわたり国際関係に影響を与えることのもう一つの例です。これは、外国の介入を始める前に立ち止まって長期的な結果を考えるべきだという実例です。

JPR:ワシントンがウクライナから距離を置いた場合、EU は何をするのでしょうか?

SK:EU には二つの選択肢があります。一つは政策を継続することであり、それはますます戦争を続け、ウクライナへの武器供給や資金を増やすか、戦争開始から 1 か月後に仮に合意された合意に戻ってウクライナの中立を受け入れる可能性がある。これはヨーロッパにとって非常に賢明なことでしょう。アメリカがウクライナ戦争を推進するのは愚かです。ヨーロッパ人にとってはさらに愚かなことです。彼らは真の岐路に直面することになり、ヨーロッパで急進的な政党の台頭がさらに困難な状況を生むことを恐れています。

だからこそ、『ボイリング・ポイント』をウクライナの人々に捧げたもう一つの理由です。彼らが関わりたくない大国間のライバル関係の犠牲者であることに同情しています。

JPR:本の執筆やリサーチの中で、最も大きな発見の一つは何でしたか?

SK:最大の発見は、アメリカのロシアや東欧に対する外交政策が、ソ連や東欧の家族背景を持つ高官たちによっていかに完全に形作られてきたかに気づいた

ことです。元国務長官のマデリン・オルブライト氏がいました。元国家安全保障顧問ズビグニェフ・ブレジンスキがいました。元 NATO 大使のヴィクトリア・ヌーランドがいました。私の本にはこうした[名前]のリストが山ほどあります。

つまり、東ヨーロッパからの亡命者や後のソ連からの子どもや孫たちのグループがいたのです。彼らは苦々しい反ロシア憎悪の中で育ちましたが、率直に言えば、ロシアがこれらの国々に対して行ってきた歴史を見れば、それは十分に理解できます。しかし、移民の孫や子供たちがアメリカの政治や外交政策に影響を与えたいと決めたとき、彼らは当時イデオロギー的な運動に関心を持っていなかった共和党内で歓迎されませんでした。だから彼らは民主党員になった。そしてこれらの人々はバイデン政権、オバマ政権、クリントン政権を埋め尽くしました。これは、アメリカの外交政策史上、ある地域に対する主要な政策がその地域の家族背景を持つ人々によって形作られた唯一の例です。彼らはアメリカをロシアへの復讐の道具に変え、その結果アメリカの外交政策を大きく歪めた。

あの外交官たちはかなり有能だった。彼らはブラジル大使やアジア担当国務次官補などに任命されるべきでした。しかし、彼らが幼少期から植え付けられた長年の本能に従ってロシアに対して破壊行為を行える立場に置くのは独特であり、アメリカの外交政策を大きく歪めました。それが私にとって最大の啓示でした。

JPR:それは中国と台湾に関してはあまり見られない力学です。

SK:もちろんです。中国人、例えば中国移民の子どもたちや孫たちが国務省に入り、アメリカの対中国政策を形作ろうとする姿は見かけません。それに相当しますが、アメリカの他の地域に対する政策ではこれまで一度も起きたことがなく、この話の中で語られていない部分であり、『沸騰点』の重要な暴露や議論の場の一つになることを願っています。

JPR:ウクライナの工業基盤、エネルギーインフラ、人口の多くが戦争と移民によって大きく減少した中で、再建の現実的な見通しはどのようなものでしょうか?

SK:再建の見通しは非常に想像しにくいものです。まず第一に、積極的な戦闘を終わらせなければなりません。ロシア語圏では甚大な破壊が起きています。しかし、チェチェンでロシアが何をしたかを見ると、首都が事実上完全に破壊されたことから、彼らは再建の方法を知っているという印象を受けます。なぜならグロズヌイは今や繁栄する都市だからです。ウクライナの他の地域、西部はどうですか?ウクライナ人がヨーロッパに向かって「あなたたちこそが私たちをこの戦争に追い込んだのだ」と言うのは非常に正当だと思います。「被害の一部を解決するのを手伝ってくれないか?」

JPR:最後に、これは NATO の拡大の終わりなのでしょうか、それともバルカン半島にはさらなる拡大の余地があるのでしょうか?

SK:NATO の拡大は当分の間起こるとは思いません。しかし、私が本当に望んでいるのは、ワシントンの誰もがこれを理解しているなら、それを口にしてほしいということです。代わりに、ロシアに圧力をかけるために曖昧にしようとしています。それを発表することは世界的な緊張緩和の一環ですが、一部の勢力ではそれはロシアへの譲歩と見なされ、緊張を維持することはむしろ我々の利益になると考えられています。私はそれが真実だとは思いませんし、その考え方が薄れるまでは、ウクライナの繁栄した未来を見るのは難しいでしょう。

この記事は、インディペンデント・メディア・インスティテュートのプロジェクトである Economy for All によって制作されました。

ご質問の前提について、ひとつ注意が必要です。「アメリカの対ロシア・東欧政策が彼らによって“完全に形作られた”」と断定することはできません。米国

の対外政策は大統領、議会、軍、情報機関、シンクタンクなど多くの主体によって形成されます。ただし、ソ連・東欧との個人的な歴史を持つ移民・移民の子孫が、対ロシア観に大きな影響を与えたことは事実です。以下、それぞれの人物についてまとめます。

1. マデリン・オルブライト

（1937-2022、国務長官 1997-2001）

オルブライトはチェコスロバキアのプラハ生まれで、外交官の父ヨゼフ・コルベルを持つ。1939 年のナチス占領で一家は英国へ亡命し、戦後に帰国したが、1948 年の共産党クーデターにより再び亡命を余儀なくされ、米国へ移住した。彼女自身は後年まで知らなかったが、ユダヤ系の家系であり、祖父母の多くがホロコーストで命を落としている。こうした二重の亡命体験は、全体主義への強い警戒心を形成した。 [en.wikipedia.org], [britannica.com]

オルブライトの対ロシア観は、単純な「反ロシア」というより、「民主主義陣営による東欧保護」という発想に基づいていた。彼女はクリントン政権で NATO 東方拡大を強力に推進し、ポーランド、ハンガリー、チェコの加盟を実現した。これは東欧諸国を再びロシアの勢力圏へ戻さないという戦略であった。 [biographycompass.com], [britannica.com]

また、ボスニア紛争やコソボ紛争では軍事介入を支持した。彼女はミュンヘン会談やチェコスロバキアの歴史をしばしば引き合いに出し、「侵略者への宥和はさらなる侵略を招く」と主張した。ソ連による東欧支配の経験を念頭に置き、民族浄化や権威主義への強硬対応を求めたのである。 [umw.edu], [ebsco.com]

ロシア側から見ると、NATO 東方拡大は冷戦後のロシア弱体化に乗じた包囲政策と映った。しかしオルブライト自身は、これをロシア封じ込めではなく、中東欧諸国の安全保障を確立するための政策と位置付けていた。彼女の戦略思想の核心は、「チェコ人亡命者として二度祖国を失った経験」から生まれた、民主主義共同体の拡大と保護であった。

---

2. ズビグニェフ・ブレジンスキー

（1928-2017、国家安全保障担当補佐官 1977-1981）

ブレジンスキーはポーランド・ワルシャワ生まれで、外交官の父に従い幼少期をドイツ、ソ連、カナダで過ごした。彼はナチズムの台頭とスターリン体制の恐怖政治を間近に見て育った。第二次世界大戦後、祖国ポーランドがソ連圏に組み込まれたため帰国できなくなり、この経験が生涯を通じた反ソ連思想の原点となった。 [ja.wikipedia.org], [en.wikipedia.org]

カーター政権の国家安全保障補佐官として、彼はソ連を世界最大の地政学的脅威と見なした。人権問題を利用して東欧の反体制運動を支援し、ソ連圏の内部崩壊を促そうとした。また、1979 年のソ連軍アフガニスタン侵攻に対してはムジャヒディン支援を主導し、ソ連を「アフガンの泥沼」に引き込む戦略を推進した。 [en.wikipedia.org], [historicalvoices.org]

冷戦後も彼の影響力は大きかった。1997 年の著書『グランド・チェスボード』では、ユーラシア大陸の支配が世界政治を決定すると論じ、特にウクライナをロシア帝国再建を阻止する鍵と位置付けた。東欧諸国の NATO 加盟も積極的に支持した。 [geopol.uk], [researchre...ry.wvu.edu]

ブレジンスキーの特徴は、感情的な反ロシア主義というより、ポーランド人としてロシア帝国とソ連帝国の脅威を実体験し、それを地政学理論へ体系化した点にある。彼にとってロシア問題は単なる外交課題ではなく、祖国の歴史そのものだった。

---

3. ヴィクトリア・ヌーランド

（1961 年生、NATO 大使、欧州・ユーラシア担当国務次官補、国務次官）

ヌーランドはニューヨーク生まれで、オルブライトやブレジンスキーのような東欧亡命者本人ではない。しかし父方はベッサラビア（現在のモルドバ地域）やベラルーシにルーツを持つ東欧系ユダヤ人移民の家系である。大学ではロシア文学とロシア史を学び、外交官としてソ連担当デスクやモスクワ大使館勤務を経験した。ロシア語にも堪能である。 [en.wikipedia.org], [ja.wikipedia.org], [2009-2017.state.gov]

彼女は冷戦後世代の対ロシア強硬派を代表する存在となった。NATO 大使時代には NATO 拡大と対ロシア政策を担当し、2000 年代から一貫して東欧諸国の西側統合を支持した。 [2009-2017.state.gov], [2001-2009.state.gov]

最も有名なのは 2014 年のウクライナ危機である。欧州・ユーラシア担当国務次官補としてマイダン運動を支持し、親ロシア派のヤヌコビッチ政権崩壊後のウクライナ支援を主導した。ロシアによるクリミア併合後は制裁強化やウクライナ軍支援の主要な提唱者となった。 [ja.wikipedia.org], [2009-2017.state.gov]

さらに 2022 年以降のロシア・ウクライナ戦争では、バイデン政権の国務次官として対ウクライナ支援の中心人物の一人となった。彼女の対ロシア観は、ブレジンスキー流の地政学とネオコン的民主化戦略が結びついたものと評されることが多い。ロシア政府やロシア系メディアからは「反ロシア政策の象徴的人物」と見なされているが、本人は「主権国家の選択権擁護」という立場を一貫して主張している。 [ja.wikipedia.org], [2009-2017.state.gov]

総括

三者に共通するのは、東欧・旧ソ連圏の歴史に深い個人的関わりを持ち、「ロシア国家による周辺諸国支配」を最大の地政学的脅威とみなした点です。

オルブライト：チェコ亡命者として NATO 拡大を推進

ブレジンスキー：ポーランド出身の戦略家としてソ連封じ込めを理論化

ヌーランド：旧ソ連地域専門家としてウクライナの西側統合を支援

この系譜は、冷戦終結後の米国外交における「東欧派（Eastern European school）」とも呼べる潮流を形成し、現在のウクライナ政策にも大きな影響を残しています。